



お久しぶりです

No. 8 が 2009 年の 5 月 10 日だったので、5 年振りです。すみません、お待たせしました。ちなみに、No. 8 の終わりに、(次回は大くさんの概念を手に入れる方法と、写実の扉を叩く手のお話です。)と書いたのですが、その時どんなことを云いたかったのかほとんど覚えていません。でも、『絵を描くという行為は、自己表現と同時に、意味の伝達という側面も含んでいるので、共通言語としての概念画になるのです。つまり、文章表現する人がたくさんのボキャブラリーを持っているように、画家は、たくさんの概念を持っているのです。』とも書いています。たくさんの概念を持つ方法で最も分かり易いのは、文筆家が、表現するときにはたくさんの言葉を使うように、絵描きはたくさん描くのです。それともう一つ大切なことは、美術の場合は答えは一つではないということです。分かり易いお話としては、木の幹は茶色、葉っぱは緑色、空は青色、という概念は、こどもにとって一つの収穫であり成長なんです。別の視点から見ると、停滞になるのです。絵画表現で一番説得力があるのは、絵を描いている人の感動の揺らぎが鑑賞者に伝わることではないでしょうか。始まりとしては、木の幹は茶色で良いのですが、いつまでもそのままということは、こどもの中では、感動の無い記号化された認識になっていて表現の停滞が起こっているのです。この停滞にどのように対応したら良いのかは、No. 6 で一度書きましたが再度書いておきます。秋の季節が最適なんです。葉っぱは緑だと思込んでいるこどもに窓の外の紅葉している葉を示して緑だけではないことに気付かせるのです。



写実画

僕は、写実の最高峰にいるのは、レオナルド・ダ・ヴィンチだと思っています。そして、ダヴィンチの絵は写実を超えた神懸かりの域まで行っているように感じます。美術史的には、写実主義の代表はクールベですが、ダヴィンチが活躍したルネッサンス以降の絵画は、おおまかに云って印象派を含めて写実的だと云えます。歴史的には写実的な絵画に幕を引いたのは産業革命のなかの写真機の発明ですが、最近の絵画にスーパーリアリズムというものがある、これは敢えて写真のように描かれています。それでは、ここで写実画の扉を開いてみましょう。先ほどたくさんの概念を持つ話をしましたが、ボキャブラリーを扱う辞書の編集者が優れた文学を生む訳ではないようにボキャブラリーも絵画における概念も持っていれば良いと云うことではなくて使い手のセンス次第なんです。さて、ここでセンスと云う曖昧な言葉が出て来ましたが、センスを磨くにはどうしたら良いのでしょうか？辞書には、センスとは『微妙な違い、味わいを感じ取る感覚』と書いてあります。つまり、微妙な違いや微妙な味わいを感じ取る為にはたくさんの実践と経験が必要であり、その中から得られたものを忘れないこだわりがあると云うことです。それでは、No.10でもうちょっと分かり易いお話をしましょう。